

論文

父親の家事参加が自身の心理的 Well-being に与える影響

中嶋和夫¹⁾・朴 志先²⁾
 小山嘉紀³⁾・尹 靖水⁴⁾

要約：本研究は、就学前の児の父親の家事参加が自身の心理的 Well-being に与える影響を明らかにすることを目的とした。調査は K 県 C 市と O 県 K 市内の保育所を利用している 1,000 世帯を対象に実施した。本研究では「父親の家事参加と自身の心理的 Well-being の関係において、父親の家事参加は、自身の家族・家庭への貢献感の認知を通して夫婦関係満足感と精神的健康に影響を与え、また夫婦関係満足感は直接的または精神的健康を通して間接的に健康関連 QOL に影響する」と仮定し、構造方程式モデリングにより因果関係モデルの検討を行った。その結果、父親の家事参加は、1) 家族・家庭への貢献感から健康関連 QOL に直接的に影響すること、また加えて 2) 夫婦関係満足感ならびに精神的健康を通して健康関連 QOL に間接的に影響することを明らかにした。以上の結果は、父親の QOL の向上という点で、家事参加を促進することの重要性を示唆している。

キーワード：父親、家事参加、心理的 Well-being

目次

- 1 緒言
- 2 研究方法
- 3 研究結果
 - 3-1 対象者の属性
 - 3-2 各測定尺度の得点および相関分析
 - 3-3 父親の家事参加が自身の心理的 Well-being に及ぼす影響
- 4 考察

1 緒言

日本の女性労働力率を年齢別にみると、欧米とは異なって、結婚と出産を期に女性の市場労働への参加が低下する M 字型の就業構造を維持している。この状況は、男女共同参画社会に向いつつも、「男性は市場労働、女性は家事労働」といった性別役割分業

1) 岡山県立大学保健福祉学部、同志社大学社会学部嘱託講師

2) 岡山県立大学大学院保健福祉学研究科博士後期課程

3) 岡山県立大学大学院保健福祉学研究科研究生

4) 梅花女子大学現代人間学部

*2011 年 12 月 9 日受付、2012 年 1 月 11 日掲載決定

がいまだ強固なことを示唆している。そのため有配偶女性の就業率が平成 11 年度 44.2 %，平成 16 年度 47.4 %，平成 21 年度 53.2 % と年々増加し続けている中で，既婚女性の多くは仕事と家庭の両立に強く負担を感じていることが知られている（内閣部，2004）。既婚女性の役割負担を緩和させるためには，男性の家事労働への参加が不可欠であるが，内閣府の平成 22 年版男女共同参画白書によれば，家庭において生計維持のための収入を担うのが主に男性で，家事の多くは女性によって担われており（内閣部，2010），父親の家事参加の促進は社会的な課題と言えよう。

父親の家事参加に関する従来の研究では，社会学を中心としてかなりの研究蓄積がなされてきたが，その基本的な問題意識は父親の家事参加の規定要因の解明を企図したものとなっている（水落，2006）。その規定要因については，すでに社会学的な仮説が構築されており，例えば，イデオロギー説，相対的資源説，時間的制約説という論点から論じられている（李，2006）。他方，父親の家事参加が家族構成員に与える影響について検討した研究もなされている。それは配偶者に与える影響について検討した研究が多数を占め，父親の家事参加量が多いほど，配偶者の夫婦関係満足感が高くなる，あるいは精神的健康に肯定的な影響を与えることを指摘している（Belsky・John，1995；蟹江，2005；大和，2006）。核家族世帯が一般化する中で，仕事と家庭の両立を必要とする世帯が年々増えていることを考慮するなら，夫婦の家事分担の意義づけを明確にしておくことは重要であろう。たとえば朴ら（2011）は父親の育児参加が自身の心理的 Well-being に与える影響について検討し，その結果，育児参加の頻度が高い父親ほど，心理的 Well-being が高いといった知見を得ている。その因果関係モデルは，Gruenewald ら（2007）の他者貢献感（feeling of usefulness to others）に基づいて親の育児参加を家庭への提供的サポートと捉え，父親の育児に対する貢献感が自身の Well-being にインパクトを与えるといったメカニズムを仮定している。この因果関係モデルを援用するなら，家庭内で展開されている父親の家事は，父親の家庭に対する提供サポートとして見なすことができ，その父親自身へインパクトを明らかにしておくことは，家事参加の意義を明らかにする上で重要な課題と言えよう。

そこで，本研究は，今後の個人の仕事と家庭生活の調和の実現に向けた基礎資料を得ることをねらいとして，就学前の児を養育している父親の家事参加と自身の心理的 Well-being の関係について明らかにすることを目的とした。

2 研究方法

本研究では，K 県 C 市と O 県 K 市内の保育所を管轄している市の担当課等を通して協力が得られた保育所 15 箇所を利用している 1,000 世帯（C 市：6 保育所 500 世帯，

K 市：9 保育所 500 世帯）を対象に「ワーク・ライフ・バランスに関する調査」を実施した。このときの調査員は各保育所の責任者とした。調査員は、調査票ならびに依頼書としてプライバシーの保護や調査参加者が納得した場合のみ回答するよう記述した文書を各世帯に配布した。調査票の配布から回収までの期間は 2 週間とした。

前記調査で回収された調査票から、統計解析に必要なデータとして、父親の回答からは年齢、収入、就業形態、父親の家事参加、父親の家族・家庭に対する貢献感の認知、夫婦関係満足感、精神的健康、健康関連 QOL を抜粋し、また母親の回答からは年齢、児の数、末子の年齢、就業形態を抜粋した。

上記変数のうち、父親が回答する家事参加の内容は、従来の研究（国立社会保障・人口問題研究所、2000）を参考に、就学前の児を養育している父親に適用可能と判断された 7 項目（1. ゴミ出し、2. 部屋の掃除、3. 洗濯をする、4. 風呂洗い（風呂掃除）、5. 炊事（食事の用意）、6. 日常（食料品）の買い物、7. 食事の後片付け）で構成した（以下、「父親の家事参加測定尺度」）。各質問項目に対する回答と数量化は、「0 点：やらない」から「4 点：毎日・毎回している」までの 5 件法とした。なお、「父親の家事参加測定尺度」の妥当性（因子的妥当性）と信頼性（内的整合性）を事前に検討したところ、7 項目 1 因子モデルのデータへの適合度は概ね良好な数値を示し（CFI = 0.969, RMSEA = 0.093）、またクロンバック α 信頼性係数も 0.79 と良好な数値を示した。

父親の家族・家庭への貢献感は、Ellen（1993）や Gruenewald ら（2007）の「他者貢献感（feeling of usefulness to others）」の概念を基礎に朴ら（2011）が開発した「家族・家庭への貢献感測定尺度」で測定した（以下、「父親の家庭・家族への貢献感測定尺度」）。この尺度は、家族に対する自身の貢献の程度に関する満足度を意味しており、7 項目（1. レジャー（余暇）を家族と一緒にする、2. 会話を家族と一緒にする、3. 家事、4. 育児（介護）、5. 家族との人間関係を作る、6. 自分の家族愛の実現、7. 家族に対する経済的な支え）で構成されている。回答と数量化は「0 点：いいえ」「1 点：どちらでもない」「2 点：はい」の 3 件法とした。「父親の家庭・家族への貢献感測定尺度」の妥当性（因子的妥当性）と信頼性（内的整合性）を事前に検討したところ、7 項目 1 因子モデルのデータへの適合度は概ね許容できる水準にあり（CFI = 0.990, RMSEA = 0.102）、またクロンバック α 信頼性係数は 0.85 と良好な数値を示した。

夫婦関係満足感は、Norton（1983）が開発した「QMI（Quality Marriage Index）」を諸井（1996）により訳された日本語版「夫婦関係満足感尺度」で測定した。各質問項目に対する回答と数量化は、「0 点：ほとんどあてはまらない」から「3 点：かなりあてはまる」までの 4 件法とした。ただし、今回のデータにおいて、項目間の相関関係が高かったこと、また 6 項目 1 因子モデルの適合度（CFI が 0.965, RMSEA が 0.286）が統計学的な許容水準になかったことから、項目間の相関係数を参考（「私と妻の関係は、非常

に安定している」と「私たちの夫婦関係は、強固である」の相関係数が0.834であった)にしつつ内容的な面で重複していると判断された「私たちの夫婦関係は、強固である」を削除し、あらためて5項目で構成した1因子モデルのデータへの適合度を検討した。結果は、CFIが0.997、RMSEAが0.078と統計学的に許容できる水準であった。そのクロンバックの α 信頼性係数は0.90であった。

精神的健康は、Goldbergら(1979)が開発した「General Health Questionnaire」の12項目短縮版(以下、「GHQ-12」とする)で測定した。GHQ-12の回答と数量化は、GHQ採点法に従った(福西, 1990)。そのため、GHQ-12の得点は、得点が高いほど精神的に不健康な状態にあることを意味している。なお、「GHQ-12」の妥当性(因子的妥当性)と信頼性(内的整合性)を事前に検討したところ、12項目1因子モデルのデータへの適合度は良好であり(CFI=0.965, RMSEA=0.066)、またKR-20信頼性係数は0.85と良好な数値を示した。

健康関連QOLは、中嶋ら(2003)が開発した「健康関連QOL満足度尺度」を構成する5領域15項目のうち、まず3領域(身体的因子、精神的因子、社会的因子)9項目を抜粋し、そのうち、それら3領域に対して疲労の回復能力、物事に対する集中力、異性との関係に関する内容をそれぞれ1項目追加し、計12項目で測定した(以下、「改訂3領域版健康関連QOL満足度尺度」)。各質問項目に対する回答と数量化は、「0点:いいえ」「1点:どちらでもない」「2点:はい」の3件法とした。なお、「改訂3領域版健康関連QOL満足度尺度」の妥当性(因子的妥当性)と信頼性(内的整合性)を事前に検討したところ、「身体的因子」「精神的因子」「社会的因子」を第一次因子、「健康関連QOL」を第二次因子とする「改訂3領域版健康関連QOL測定尺度」のデータへの適合度は、CFIが0.971、RMSEAが0.082と統計学的な許容水準を満たしており、かつクロンバックの α 信頼性係数も良好な数値を示した(尺度全体で0.87、「身体的因子」は0.86、「精神的因子」は0.80、「社会関係因子」は0.78)。

統計解析に先立ち、朴ら(2011)の研究成果に基づいて、「父親の家事参加は、父親の家族・家庭への貢献感の認知を通して自身の心理的 Well-being、すなわち夫婦関係満足感と精神的健康(抑うつ傾向)に影響を与え、また夫婦関係満足感と精神的健康を通して間接的に健康関連QOLに影響する」とした因果関係モデルを構築した。また、このとき父親の家事参加から夫婦関係満足感と精神的健康に対する直接効果に加え、父親自身の家族・家庭への貢献感の認知の夫婦関係満足感や精神的健康、さらに健康関連QOLに対する直接効果についても同時に検討するものとした。統計解析には構造方程式モデリングを採用した。

上記の因果関係モデル等のデータへの適合性は、Comparative Fitness of Index (CFI)、Root Mean Square Error Approximation (RMSEA)により評価した。一般的に、CFIは0.90

以上、RMSEA は 0.08 以下であることが適切なモデルと判断される。なお、パラメータの推定には Weighted Least Square parameter estimates using a diagonal weight matrix with robust standard errors and mean-and variance-adjusted chi-square test statistic (WLSMV) を採用し、推定されたパス係数の有意性は検定統計量の絶対値が 1.96 以上（有意水準 5%）を示したものを統計学的に有意と判断した。統計ソフトは、「SPSS 12.0 J for Windows」と「Mplus 2.14」を使用した。

配布した調査票は、412 世帯（C 市：回収 217 世帯，K 市：回収 195 世帯）から回収（回収率 41.2%）できた。ただし統計解析には、前記の因果関係モデルの検証に必要なすべての変数に欠損値を有さない 326 世帯のペアデータを用いた。

3 研究結果

3-1 対象者の属性（表 1）

父親の平均年齢は 36.2 歳（標準偏差 5.39，範囲 22 歳～53 歳），母親の平均年齢は 34.2 歳（標準偏差 4.41，範囲 24 歳～47 歳）であった。子どもの数は、「1 人」が 97 人（29.8%）、「2 人」が 149 人（45.7%）、「3 人」が 64 人（19.6%）、「4 人」が 13 人（4.0%）、「5 人」が 3 人（0.9%）であり、末子の平均年齢は、2.5 歳（標準偏差 1.69，範囲 0 歳～6 歳）であった。父親の月収は「20 万円～30 万円未満」が 158 人（48.5%）で最も多く、「30 万円～40 万円未満」が 88 人（27.0%）、「10 万円～20 万円未満」が 32 人（9.8%）、「40 万円～50 万円未満」が 25 人（7.7%）、「50 万円以上」が 14 人（4.3%）、「10 万円未満」が 6 人（1.8%）の順であった。父親の職業は「会社員（正規職）」が最も多く 220 人（67.5%），母親は「パート・アルバイト」が 121 人（37.1%）を占めていた。

3-2 各測定尺度の得点および相関分析（表 2）

本研究で使用した測定尺度における得点の平均値を算出したところ、「父親の家事参加測定尺度」では平均 9.7 点（標準偏差 5.94）、「父親の家族・家庭への貢献感尺度」では平均 8.3 点（標準偏差 4.03）、「夫婦関係満足感尺度」では平均 15.5 点（標準偏差 3.00）、「GHQ-12」では平均 2.5 点（標準偏差 2.86）、「改訂 3 領域版健康関連 QOL 満足感測定尺度」では平均 11.6 点（標準偏差 6.30）となっていた。なお、「GHQ-12」については、2 点以下/3 点以上をカット・オフ・ポイントとするなら、3 点以上の精神的に不健康と推定される父親は 124 人（38.0%）であった。なお、各測定尺度の合計得点を用いて相関分析を行ったところ、父親の家事参加と夫婦関係満足感、精神的健康、健康関連 QOL との関係を除き、すべて有意な関係性が認められた。

表 1 対象者の属性分布 (n=326)

単位：人 (%)

父親の平均年齢	平均年齢±標準偏差	36.2±5.39	範囲	22-53 歳
母親の平均年齢	平均年齢±標準偏差	34.2±4.41	範囲	24-47 歳
末子の平均年齢	平均年齢±標準偏差	2.5±1.69	範囲	0-6 歳
子どもの数	1 人		97	(29.8)
	2 人		149	(45.7)
	3 人		64	(19.6)
	4 人		13	(4.0)
	5 人		3	(0.9)
父親の月収	10 万円未満		6	(1.8)
	10 万円～20 万円未満		32	(9.8)
	20 万円～30 万円未満		158	(48.5)
	30 万円～40 万円未満		88	(27.0)
	40 万円～50 万円未満		25	(7.7)
	50 万円以上 収入なし		14 3	(4.3) (0.9)
父親の職業	会社員 (正規職)		220	(67.5)
	会社員 (非正規職)		5	(1.5)
	公務員 (地方・国家)		21	(6.4)
	自営業		34	(10.4)
	専門職 (弁護士・医師・看護師・研究者など)		26	(8.0)
	パート・アルバイト		5	(1.5)
	その他		11	(3.4)
	無職・専業主夫		4	(1.2)
母親の職業	会社員 (正規職)		64	(19.6)
	会社員 (非正規職)		13	(4.0)
	公務員 (地方・国家)		25	(7.7)
	自営業		19	(5.8)
	専門職 (弁護士・医師・看護師・研究者など)		48	(14.7)
	パート・アルバイト		121	(37.1)
	その他		16	(4.9)
	無職・専業主婦		20	(6.1)

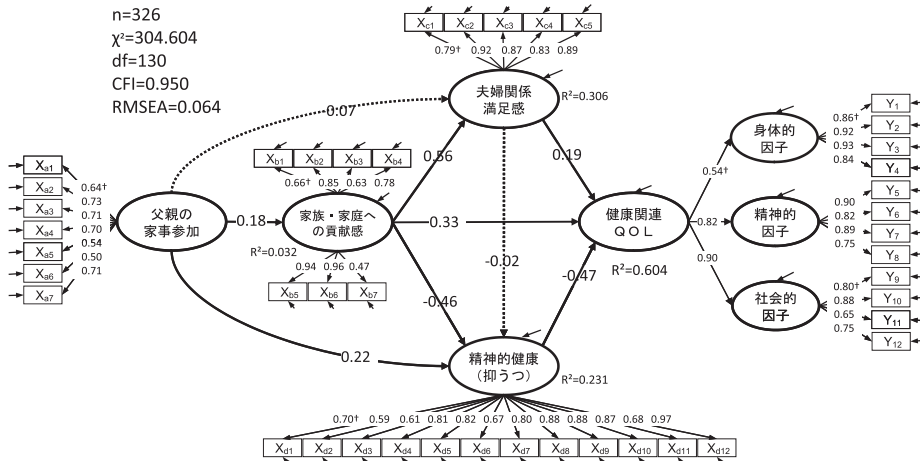
表 2 各測定尺度の得点および相関関係

	平均値 ±標準偏差	相関関係				
		父親の 家事参加	家族・家庭 への貢献感	夫婦関係 満足感	精神的健康 (GHQ-12)	健康関連 QOL
父親の家事参加	9.7(±5.94)	1				
家族・家庭への貢献感	8.3(±4.03)	0.168**	1			
夫婦関係満足感	15.5(±3.00)	0.032	0.401**	1		
精神的健康 (GHQ-12)	2.5(±2.86)	0.067	-0.339**	-0.222**	1	
健康関連 QOL	11.6(±6.30)	-0.056	0.484**	0.336**	-0.439**	1

注：*p<0.05, **p<0.01

3-3 父親の家事参加が自身の心理的 Well-being に及ぼす影響 (図 1)

父親の家事参加が自身の心理的 Well-being に及ぼす影響に関する因果関係モデルのデータに対する適合度は、CFI が 0.950, RMSEA が 0.064 と統計学的な許容水準を満たしていた。このときのパス係数に着目すると、父親の家事参加から家族・家庭への貢献



注 1) 図中の \pm はモデル識別のために制約を課したパスである。
 注 2) 図中の破線は統計学的に非有意なパス、実線は統計学的に有意なパスである。
 注 3) 図の煩雑化を避けるため、誤差変数および誤差変数間の相関係数は省略している。

図 1 父親の家事参加が自身の心理的 Well-being に与える影響 (標準化解)

感に向かうパス係数は、0.18 で統計学的に有意な水準にあった。また、父親の家事参加から精神的健康に向かうパス係数は0.22 で統計学的に有意な水準にあった。しかし、父親の家事参加から夫婦関係満足感に向かうパス係数は、統計学的に有意ではなかった。また、家族・家庭への貢献感から夫婦関係満足感に向かうパス係数は0.56、精神的健康に向かうパス係数は-0.46、健康関連 QOL に向かうパス係数は0.33 といずれも統計学的に有意な水準を示した。なお、夫婦関係満足感から精神的健康に向かうパス係数は-0.02 と統計学的に有意な水準ではなかったが、健康関連 QOL に向かうパス係数は0.19 と統計学的に有意な水準にあり、かつ精神的健康から健康関連 QOL に向かうパス係数は、-0.47 と統計学的に有意な水準にあった。

4 考 察

従来の研究では、父親の家事参加が母親にとってどのような影響があるかはさまざまな観点から研究されてきたが (Belsky・John, 1995; 蟹江, 2005; 大和, 2006)、父親の自身へのポジティブな影響についてはほとんど検討されていない。しかし、最近、他者に対するサポートの提供が、自身の精神的健康にポジティブな影響を与えるといった研究 (Lu ら, 1992; Brown ら, 2003; 山本ら, 2008) や父親の育児参加が自身の心理的 Well-being を向上させるといった研究 (朴ら, 2011) が報告されており、本研究では、そのような研究成果を基礎に未就学児の父親の家事参加と自身の心理的 Well-being の関係について明らかにすることを目的に行った。具体的には、本研究では、「父親の家

事参加は、家族・家庭に対する貢献感（他者貢献感）を通して自身の心理的 Well-being, すなわち夫婦関係満足感と精神的健康（抑うつ傾向）に影響を与え、また夫婦関係満足感は直接的または精神的健康を通して間接的に健康関連 QOL に影響する」といった因果関係モデルを構築した。このうち、家族・家庭に対する貢献感と夫婦関係満足感の因果関係については、夫が自分の家計への貢献度が、配偶者満足感に影響するとする知見（平山，2003）や、夫の家事参加と夫の認識する夫婦関係満足感の間に直接的関係があるという研究があまりなされていないこと（中川，2008）を考慮し、因果関係モデルに投入した。なお、本調査の統計解析においては、モデルの構成力が柔軟でかつ測定誤差の分離が可能であり、さらには複数の適合度指標によって因果関係モデルの適切さのアセスメントができる構造方程式モデリングを採用した。

統計解析の結果、本研究では第一に、父親の家事参加が、父親の家族・家庭に対する貢献感を通して父親自身の健康関連 QOL を高めるといったポジティブな関係を明らかにした。この結果は、他者にサポートを提供することで自尊感情が高くなること（山本ら，2008）、他者のために行った自分の行動が有用であると認知することほど生活満足感を高く評価すること（Stevens, 1993； Gruenewald ら，2007）、また提供的サポートが他者貢献感を通して生活満足感に影響すること（矢庭，2009）、さらには父親の育児参加が家族家庭貢献感を通して心理的 Well-being に肯定的な影響を与えるとした知見（朴ら，2011）などとほぼ一致する結果である。

第二に、本研究では父親の家事参加は直接的に夫婦関係満足感に影響するのではなく、家族・家庭に対する貢献感を通じて間接的に夫婦関係満足感に影響し、さらに夫婦関係満足感が健康関連 QOL に影響することを明らかにした。この結果は、父親の育児参加と夫婦関係満足感の関係が有意でなかったことと矛盾しないものである（中川，2008；朴ら，2011）。また、心理学研究の知見では、夫婦の結婚満足度が、実際の家事分担要因ではなく、家事分担に対する夫婦の価値観のずれ、つまり、家事分担についてどう認知しているかに起因する可能性がある」と指摘している（相良，2008）。また、本研究で、家事参加と夫婦関係満足感の間に、媒介変数として家族・家庭に対する貢献感を投入した結果、父親の夫婦関係満足感において、父親の家事参加そのものの影響よりは、家族・家庭に対する貢献感を通して夫婦関係満足感に影響を与えるという知見が得られた。この知見に関して、著者らは家事といったサポートを提供することで、自身について高く評価し、母親も満足させているといった自らの認識を意味する結果であると推察した。

第三に、本研究では父親の家事参加は精神的健康に直接影響し、家族・家庭に対する貢献感を介して、精神的健康に直接的な影響を持ち、さらに健康関連 QOL に影響することが明らかにできた。この知見は、父親の家族・家庭に対する貢献感が自身の精神的

健康や QOL の向上にとって有益な資源になる可能性が高いことを示唆している。蟹江 (2005) の研究では、父親は食事関連家事、掃除関連家事のいずれにおいても抑うつとの関連は認められなかった。このことについて蟹江 (2005) は、父親の家事への関与は非常に低く、抑うつとの関連が認められるほどのレベルにまで達していないためではないかと述べている。しかし、本研究では、父親の家事参加頻度が多いほど、抑うつ傾向を示していたことから、父親が家事を生活のストレスとして認識している可能性があるものと推察された。ただし、この二つの関係に関する研究の蓄積が少ないことを勘案するなら、さらなる継続した検討が望まれよう。また、本研究では、父親の家事参加と精神的健康の間において、家族・家庭への貢献感が媒介効果を有していたが、この結果はサポート提供が他者に対する自身の貢献に満足しているほど生活満足感も高くなるといった知見 (矢庭, 2009) や父親の育児参加が家族・家庭への貢献感を通して精神的健康を高めるといった知見 (朴ら, 2011) と一致しているものと推察された。ただし、父親の夫婦関係満足感と精神的健康との関連は認められなかった。この結果は、育児参加の研究結果と同様な結果であり (朴ら, 2011)、夫婦関係満足感が精神的健康や主観的幸福感を左右する要因であるといった従来の結果とは異なっている (遠藤, 1997; 伊藤ら, 2004; 桐野ら, 2011)。著者らは、この結果について、それらふたつの変数間の単相関は統計学的には有意であったものの、他の変数も考慮した複雑な因果関係モデルにおいては、夫婦関係満足感と精神的健康の関係を希薄化された可能性が否定できないと推察した。

以上、本研究では、就学前の児を持つ父親を対象に、父親の家事参加は家族・家庭に対する貢献感から健康関連 QOL に直接的に影響すること、また、夫婦関係満足感ならびに精神的健康を通して健康関連 QOL に間接的に影響することを明らかにした。このことは、父親の家事参加が自身の心理的 Well-being においても肯定的な影響を与えていることを意味し、従って今後は家事においても育児と同様に、夫婦間の役割分担の再編や父親が積極的に参加できるように、社会的な支援システムを構築していくことが必要であると言えよう。たとえば、各企業における仕事と家庭の調和を志向した各種制度の充実化にのみ依存することではなく、政府が主導的にそれらを支援する社会システムの構築を急ぐ必要があるだろう。

(本研究は、平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金『家族・労働政策等の少子化対策が結婚・出生行動に及ぼす効果に関する総合的研究』：代表：高橋重郷) による)

参考文献

李基平 (2006) 「第 8 章夫の家事参加に与える影響 - 夫と妻の性別役割分業意識を中心に -」, 朝井友紀子

- ほか 12 人「共働社会の到来とそれをめぐる葛藤－夫婦関係－」『東京大学社会科学研究所』, 128-136.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子 (2004)「既婚者の心理的健康に及ぼす結婚生活と職業生活の影響」『心理学研究』75(5) : 435-441.
- 遠藤由美 (1997)「親密な関係性における高揚と相対的自己卑下」『心理学研究』68 : 387-395.
- 蟹江教子 (2005)「父親の家事・育児と父親および母親の主観的健康」『季刊家計経済研究』68 : 62-71.
- 桐野匡史ほか 5 人 (2011)「共働き世帯の父親の育児参加と母親の心理的 Well-being の関係」『厚生指標』58(3) : 1-8.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2000)「第 2 回全国家庭動向調査」
- 相良順子・伊藤裕子・池田政子 (2008)「夫婦の結婚満足度と家事・育児分担における理想と現実のずれ」『家族心理学研究』22(2) : 119-128.
- 内閣府 (2004)「平成 16 年度版男女共同参画白書」
- 内閣府 (2010)「平成 22 年度版男女共同参画白書」
- 中川まり (2008)「夫の家事・育児参加と夫婦関係－乳幼児をもつ共働き夫婦に関する－研究－」『家庭教育研究所紀要』30 : 97-197.
- 中嶋和夫・香川幸次郎・朴千萬 (2003)「地域住民の健康関連 QOL に関する満足度の測定」『厚生指標』50(8) : 8-15.
- 朴志先ほか 5 人 (2011)「未就学児の父親における育児参加と心理的ウェルビーイングの関係」『日本保健科学学会』13(4) : 160-169.
- 平山順子・田矢幸江・柏木恵子 (2003)「育児期夫婦の配偶者満足度を規定する要因－妻の就労形態別の検討－」『発達研究』17 : 69-85.
- 福西勇夫 (1990)「日本版 General Health Questionnaire (GHQ) の cut-off point」『心理臨床』3(3) : 228-234.
- 水落正明 (2006)「第 6 章共働き世帯における家計構造と家事分担」朝井友紀子ほか 12 人「共働社会の到来とそれをめぐる葛藤－夫婦関係－」『東京大学社会科学研究所』97-116.
- 諸井克英 (1996)「家庭内労働の分担における衡平性の知覚」『家族心理学研究』10(1) : 15-30.
- 矢庭さゆり (2009)「要介護（支援）認定を受けた高齢者の他者への提供サポートが他者貢献感および生活満足感に与える影響」『新見公立短期大学紀要』29 : 59-65.
- 大和礼子 (2006)「夫の家事・育児参加は妻の夫婦関係満足感を高めるか？」西野理子・稲葉昭英・嶋崎尚子編『第 2 回家族についての全国調査 (NFRJ 03) 第 2 次報告書 No.1 : 夫婦, 世帯, ライフコース』日本家族社会学会全国家族調査委員会, 17-33.
- 山本友美子・堀匡・大塚泰正 (2008)「大学生におけるサポート提供者知覚が精神的健康に及ぼす影響－エスティーム・エンハンスメント理論に基づく縦断的検討－」『広島大学心理学研究』8 : 147-162.
- Belsky, J・John, K (安次嶺佳子訳)『子どもをもつと夫婦に何が起こるか』東京：草思社.
- Brown, S. L・Nesse, R. M・Vinokur, A. D・Smith, D. M (2003) *Providing social support may be more beneficial than receiving it: Results from a prospective study of Mortality*, Psychological Science, 14 : 320-327.
- Ellen, S. S (1993) *Making sense of usefulness-an avenue toward satisfaction in later life*, Int'l. J. AGING AND HUMAN DEVELOPMENT, 37(4) : 313-325.
- Goldberg, D. P・Hiller, V. F (1979) *A scaled version of the General Health Questionnaire*, Psychological Medicine, 9 : 139-145.
- Gruenewald, T. L・Karlmanngla, A. S・Greendale, G. A・Singer, B. H・Seeman, T. E (2007) *Feelings of Usefulness to Others, Disability, and Mortality in Older Adults-The MacArthur Study of Successful Aging*, Journal of Gerontology. PSYCHOLOGICAL SCIENCES, 62 B(1) : 28-37.
- Lu, L・Argyle, M (1992) *Receiving and giving support: Effects on relationships and well-being*, Counselling Psychiatry Quarterly, 5 : 123-133.
- Stevens, E. S (1993) *Making sense of usefulness-An avenue toward satisfaction in later life*, Aging and human development, 37(4) : 313-325.

The Effects of Participation of Household on the Psychological well-being in Fathers

Kazuo Nakajima, Ji Sun Park, Yoshinori Koyama and Jungsoo Yoon

The purpose of the study was to clarify the effects of participation of household on the psychological well-being of fathers. In this study, 1,000 household which have been using nursery centers in C city of K prefecture and K city of O prefecture were surveyed. We designed the causal model to examine the relationship between father's household and health-related QOL. Specifically, father's participation of household impact to marital satisfaction and mental health through recognition of sense of usefulness to family, and marital satisfaction impact a direct effect or through mental health indirectly on health-related QOL. Above model was examined by using structural equation modeling. The results was as follows, 1) father's participation of household is contributing to health-related QOL through recognition of feeling of usefulness to family. 2) father's participation of household is contributing to health-related QOL through marital satisfaction and mental health. These results suggests that the promotion father's participation of household is important problems.

Key words : Father, Household, Psychological well-being

